流布木『発心集』巻六に『秀秀師・教奇の事』と題された一話

A

流布本『発心集』巻六に『秀秀師・教奇の事』と題された一話がある。やや長くなるが、以下に全文を引用したい。

B

「何事にか、よし大いに情をかけて、うるさき事やるかかられん」と思へど、「彼の身のほどには、いかばかりの事かこれらん」と思わせしめんと、あらにいたす。さごうなし、おちぶれたたるふるさつねよと云せたり。それ等がじともたまるかし、かんなり待つ、向来も申さばと思へど、恐れ、やかに参りて申し待てるべし」と云ふ。

「思ひの外に、いとあへれに覚へて、いといとやすき事にこる。通やかに尋ねて、奉へるべし。それ等がじともたまるかし、かんなり待つ、向来も申さばと思へど、恐れ、やかに参りて申し待てるべし」と云ふ。
八幡の楽とひたつて、これに酒うるまして、よくくらし楽をす。 Cosmos

失すれば又、只一人笛吹きて明し犇げる。 REPORT

やはり、並びなき上手になりけり。

C

やかましくなんれは、何につけてかは深き罪も侍らん。

（巻六・七 新潮日本古典集成）

引用に当り、便宜三つの部分に分割し、それぞれA・B・Cと記号を付した。以下、これを利用しながら論述を進める。

二

改めて説明を加えるまでもなく、本話は「すきもの」永秀の、その心根の「途きを描くことに対する主眼がある。永秀と「すきもの」の関係で「本章の第二段（森下注）引用A」は「古事談」新に見え、永秀の「すきもの」の創意とはかけ離れた価値観に感銘を受ける。永秀に寄り添う視線は、本話の言動に近い。すなわち永秀の本質を発見する視点でもあるのだ。そしてCの話来、表現したものが常と見えてよい。当然ながら、永秀はこの話来に絡め取られCの文言を受け入れてゆく。本話の話来の構造とその効果は、以上のように説明できるよう。巧妙な語りの手法と言えど。この

E

月夜吹笛有憶虚黒之者。元正不伝正近、売二八幡別当光清。

D

件笛不徹伝来故正清許。正清不伝正近、売二八幡別当光清。

C

作成笛筆有憶虚黒之者。元正奉駐山井私宅内。不間知之笛筆有憶虚黒之者。元正門前、何人乎。其時衣被御手師ゾカント、見之山路、

B

件永具堂所司南。永秀若同人前。此言事貫所語也。件永具堂所司南。永秀若同人前。此言事貫所語也。

（巻六・七 新潮日本古典集成）

（巻六・七 新潮日本古典集成）
この二話は、永秀に関する逸話を記し、永秀の伝え総路の問題が、当面の検討の糸口となるか。

現代思想の古典文庫『古事談』で小林保治氏が指摘することなく、永秀の伝説の問題が、永秀の伝説の問題に固執するかのような姿勢が見受けられる。しかし、永秀の数奇に関わる二話が記し留められている。全体として、永秀伝説が呼んでいる。
発心集では、永秀の困窮に同情した頼清からの援助の申し出に、「観心集」を所望したという話が見える。あるいは、それを見せた。

「観心集」に登場する「観清」の子息である。永清は、永秀の箏を秘蔵していた。結局、他人に売却しようとしたが、永秀が箏を手に入れた事情が暗示されていると考えられる。光清は、「観心集」を持ち帰った。

しかし、古事談の話は、伝承経路から、発心集との関係は見出せない。しかし、古事談と発心集との関係は、伝承経路を経て、永秀に伝わる。

発心集の永秀説話をいかに読むべきか。

永秀の貧しい暮らしぶりを見かねた頼清は、援助を申し出た。永秀は、彼の箏の名を「観心集」と言っていた。その後、永秀は箏を遺留物として売却した。しかし、箏は永秀のものであった。永秀の箏を購入したのは、戦後の頼清である。「観心集」を所望したという話が見える。あるいは、それを見せた。
源和二の笛を吹くため、これに「古事談」が伝えることを「竹笛一管」の伝来に関する言葉に取り上げたものである。もはやこれが永秀伝説ではなく、『竹笛一管』についての話が重聴されたわけではない。名器に至るまでに伝わった伝説は、永秀の笛が少なかったことが伺われる。なぜなら、それに倣えば、院中には笛を手に持つ者がいたからである。

しかし、現在残っている伝説には、私が推定したような内容のものではない。永秀伝説にとどまらず、その痕跡が現れただけである。それでは、現在の伝説の形態は、いつの時点で整えられたのか。次にはこの点について検討してみたい。

次に「発心集」の永秀伝説から、問題となる部分を次に掲げる。

a. 八幡焼永秀の夢を夢し、新撰次郎、経夜絵日カタナ
b. 竹笛吹けら、後二八近隣人々、木志ツマシカリ、我家ら

トパカラヒマラ、常二八所笛吹きられ、所二八箇所に現れる。
モササリケ、
＞比ノ別当戒信者ニシタカケレハ、人ナトニ要事
中コモナカケレハ、世ラ渡タケキモソカケナケス
シケル程ニ、或時永秀、別当許行時ゴリ、別当思
シケル、此侍ハシキ物ナレハ、物コフレスラント思デ
久アリテ後、永秀所望ノール山ケレハ、何事ニトシ
ノ様ハ、申請候哉ト観タケレハ、思ニ相違シタサケ
ケルール、
＞國書齋載刊
見間宮杏薔書集成（二）
引用に際しの段階等は先の『発心集』、『古事談』
の場合巻に従う。
発心集、の説話の検討の前にまず述べておけば
本説話を後出
性の色濃いものであります。a、bの部分の『然者』
以降は、『古事談』、第
四〇三話の「如」、之を間違へ手、印を呪文、山南面に、件近辺
不生、

ｂの部分は『発心集』のＢと同話であるが、『発心集』、に類似
あるところ、『黙間記』は『戒信』とする。話柄は極めて近いが、
発心集、との間には『古事談』、と場合見られたような影響関
係は想定しにくい。『発心集』、と『黙間記』とは、恐らく別々に永
秀説話を受容したのである。
発心集、の笛は皆に永秀説話を覆変していたに違いない。本稿の最
初で分析した『発心集』、の説話を比較しても明らかだが、『漢竹の笛』
の笛説話を受容したのである。稲作、の笛説話を覆変したと
えば、『古事談』、説話が『武賢』、の言説を書き留めたものであることを

次に『古事談』、の永秀説話だが、その原型が『漢竹の笛』の起源
説を覆変した。者の言説から永秀説話の語りの巧みさは、『黙間記』
の話は既に永秀説話を覆変していたに違いない。本稿の最
初で分析した『発心集』、の説話は比較しても明らかだが、『漢竹の笛』
の笛説話を受容したのである。稲作、の笛説話を覆変したと
えば、『古事談』、説話が『武賢』、の言説を書き留めたものであることを

次の段階は、『黙間記』の創案ではない。

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに
傳説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに

伝説性のものであるか。ここに三つの事情を想定してみたい。一つに
の伝来の話である。彼の祖母は、起源の方には直接関わってはいない。

そのような判断に基づいて語り手は間き手の興味を引きつける語り、間
き手はそれに巻込まれてゆく。そんな事情は容易に推定されるよう。

また一つ。右の推定したように、『漢竹の笛』起源説が早くに永
秀説話をと変更を遂げていたとはしたが、すでにそれ単独である程度
の独立性を保っているはずである。無理に笛の伝来説と結びつけて語
る必要性も、失われていた可能性は高い。

しかし、『漢竹の笛』説話は、いつか永秀説話をとすら替えられ、
断然された形で『発心集』『古事談』『感聞記』に別個に記し留め
られることとなった。

結論から述べれば、それらは多く、『笛の家』の人々であった。

『古事談』編著者に永秀説話を語った人物「式貞」は大神氏であり、
『龍鳴抄』の著者として知られた大神基政の皆伝である。またその
基政は、『古事談』の説話Eの部分で永秀と同人かとされた『永
真』と相対した「元正」と同一人であった。笛の伝来に関しては「正
清」、「永秀」二家の枝流を競った「正近」は、ともに大神氏と相応
ぶるものである。

また、『笛の家』氏族に至るという説話伝承である。『六条大夫集』
とされたという「六条大夫集」、『権現伝』、『源氏物語』、『源氏物語』
とされる『源氏物語』、『権現伝』にみられる人物、『人名通帳』
である。詳

『古事談』と『古事談』の語り手にばいかも似つかずに、『権現伝』と『人名通帳』
の語り手から、『基通』は管絃をよく、笛の技量は天下一の
ことが知られる。笛の家の人々としても、当然交流があったと思
う。このことによって、家を成した人物ではないが、一代の名手として
笛の家たる戸部・大神氏周辺。そして石沼八幡周辺で密かに
関する記憶は、より広く共有されることがとなったのである。
七

漢竹の笛 説話は、右に述べたようにゆく限られた範囲の人々によって伝承・醸成され、いつか永秀説話へと変貌を遂げた。その変容の必然を突き詰めるのは容易でないが、『数奇』への専心を中世における一つの価値体系と見るべき、その価値を永秀の生き方そのものの中に発貫する、稲賀教二氏の説（中世数奇者の『知』と現実）『漢竹の笛』の『彼方』『世界思想』第一号にも参考になる。大神基政の残した『龍鶴抄』末尾近くに『管絃に罪なし』とありますが、稲賀氏の『発心集』Cの話末評を、『龍鶴抄』のこの文言の延長線上において理解されている。確かに稲賀氏の指摘される『龍鶴抄』の言葉と笛以外に子も望まぬ永秀の姿を重ね合わせれば、『漢竹の笛』起源論は、比較的容易に永秀の数奇説話へと変容し得たのではないか想像される。いずれにしろ、本話の伝承に笛の家が深く関与しているところだけは確かである。

また検討の余地が十分に残されていないか、強さを求めて末筆に初の著者どうもの動向から、同時代とそれ以降の文学を考える余地を残してみたい。本稿はそのささやかな試みの一例である。

（付記）

今回引用した『愚聞記』については、すでに一九九五年六月の読話文学学会において、中原香苗氏により『説話伝承の場としての講書—内斎HasColumnName『愚聞記』について—』と題した報告がなされている。そこで『愚聞記』と『古事談』『十訓抄』等の説話集との関係に言及されたようだが、残念ながら読聴の機会を逃してしまった。あるいは既知の事実を続くて述べ立てることができなかったかも知れない。ご海容を願い上げる次第である。

—orishita・yoji・広島大学文学部助手

—8—